

会員紹介：不破吉太郎さん

私の略歴



1974年に慶應義塾大学経済学部を卒業し、海外経済協力基金（OECF。現在の JICA の円借款部門の前身）に就職しました。就職後半年後から、社命により一年間仏留学し、パリ I 大学大学院の経済社会開発研究所（IEDES）でプロジェクト評価と開発計画論を学ぶと共に、ソルボンヌ大学で仏語を学びました。帰国後、アフリカ向け円借款を担当した後、1977年から2年強、経済企画庁（当時）に出向しました。1982年から3年間エジプトに駐在、帰国後、タイ・マレーシアを担当、1988年から4年近くパ

リ首席駐在員として、パリで行われる開発援助関連の国際会議のフォローや、仏語圏アフリカ・マグレブ諸国を担当しました。その後、世界銀行、IMF、欧米援助機関等、マルチ、バイの開発協力関係機関との政策対話および海外事務所統括を3年程行った後、1994年から4年ほど、ニューデリー首席駐在員として、インドに滞在しました（ネパール、ブータンを兼轄）。1998年から1年ほど、中国、モンゴルなどの北アジアと、インド、バングラデシュなどの南アジアを担当した後、1999年10月から（財）国際開発高等教育機構（FASID）に出向。2001年10月からは、OECFと旧日本輸出入銀行が統合してできた、国際協力銀行（JBIC）の開発金融研究所で、自然資源管理と紛争予防を研究しました。2002年4月から一年間、（財）日本国際交流センター（JCIE）に出向した後、2003年3月に国際協力銀行を退職。2003年4月から、法政大学大学院（環境マネジメント研究科）で、5年の任期付き教員として、国際環境協力事例演習と論文指導を、同人間環境学部で、国際経済協力論と地域協力・環境安全保障に関する研究会を担当しました。2008年4月に、ODA関連のコンサルタント活動を行う（株）グローバルグループ21 ジャパンに移り、円借款案件の事後評価と実施促進および新規案件発掘支援、インドネシアの気候変動対策プログラムローン関連のモニタリング業務などに従事して現在に至っています。

従事した仕事の内容

OECF 時代（1974年－2003年）

基本的に、日本が円借款で支援するプロジェクトの発掘、審査、実施モニタリング、完成後の事後評価、および、当該国のマクロ経済や援助受入動向の調査、ドナー協調といった仕事を中心でした。担当した国は、マグレブ（アルジェリア、チュニジア、モロッコ）、アフリカ、エジプト、タイ、マレーシア、南アジア、北アジア（中国、モンゴル）などがあり、就職直後の1974年時点では未だ台湾、韓国も含まれていましたが、その後両国とも発展し、今では援助を行う側に加わっています。海外駐在した時期は、3カ国とも大変エキサイティングな時期でした。

エジプトは、ナセル大統領時代の旧ソ連寄りの社会主義路線を 180 度転換して西側自由主



カイロ市内を悠然と流れるナイル川

義路線を打ち出し、イスラエルとの和平条約を締結したサダト大統領が暗殺されて間もない時期で、従来の旧ソ連やアラブ産油国からの援助に代わって、西側先進国からの援助が急増していた時代でした。スエズ運河拡張などのエジプトのみならず世界全体に効果が及ぶ事業があり、やりがいがありました。

パリは、革命 200 周年事業で、ノートルダム寺院や凱旋門などのモニュメントが次々と磨かれ、白い輝きを取り戻しつつありました。

インドはエジプト同様、ナラシムハ・ラオ首相の下、マンモハン・シン財務大臣が市場経済重視策を打ち出し、『眠りから醒めた巨象』として、先進国からの支援が急増し始めた時期でした。直接投資先としても注目を集めていましたが、電力、通信、道路などのインフラ不足が著しく、インフラ支援スキームとしての日本の円借款にインド側が大いに期待していた時期でした。

3 国共、その地域の大国で、立派な歴史・文化があり、誇りを持っている点が共通しています。ただ、エジプトとインドは、社会主義時代の遺産で行政手続きが複雑で、効率的に物事を処理することが難しく、駐在員は日本と相手国の間に立つ立場で大変でした。インドの方が官僚組織は優秀で、自助努力の精神も強かったと思います。一方、エジプトの官僚組織は、プライドは高く、『円借款はいずれ返すお金なので、援助する側もされる側も立場は対等』というマインドが強いのですが、仕事の面では非効率的で、オーナーシップも弱いケースが多かったと思います。しかし彼らは、個人的には陽気で愛すべき人が多く、仕事・生活ともエンジョイしていた私は、2 年だった任期延長を強く希望して、3 年駐在することが出来ました。

パリでは、毎日のようにパリでの国際会議【OECD の DAC(開発援助委員会)、国際債務交渉を行うパリ・クラブ、世銀主催の開発フォーラム会合など】に参加して、援助政策や債務交渉に関与する貴重な経験ができました。管轄するマグレブやサブサハラ仏語圏諸国や、欧州のドナーとの協議などでの出張もあり、極めて多忙な日々でした。

出向時代

最初の出向先の経済企画庁（現在の内閣府）では、総合計画局国際経済班で、日本の経済計画策定作業に国際経済面から関与する仕事を担当しました。1977 年当時は、第

一次石油危機からまだ日が浅く、資源ナショナリズムが盛り上がり、日本としては、今後石油を始めとする一次産品を安定的に確保できるか、また東西・南北関係がどのようになっていくか、という点に注目が集まっていました。一次産品の交易条件の展望作業や、OECDで当時行われていた、途上国・先進国・東側諸国の長期的な展望作業なども参考にしながら、日本を取り巻く世界経済の長期展望作業に参加させて頂けたことは、それまでの個別開発プロジェクト中心の仕事から視野を大きく広げることになり、極めて有益でした。

二回目の出向先の(財)国際開発高等教育機構(FASID)では、SRID前会長の高橋一生さんが所長をされていた、国際開発研究センターで、紛争予防と地域協力、地球公共財につき研究しました。それまでの仕事の実務中心だったので、FASIDでの多少とも研究めいた仕事に、最初は戸惑いましたが、冷戦後にルワンダなど世界各地で多発した国内紛争をWin-win精神による自然資源管理によって乗り越えられないか、との問題意識から研究に励みました。高橋一生さんが情熱的に取り組んでおられた、地球公共財の概念の普及・深化活動には、出向終了後も、高橋一生さんの指導の下、UNDPのインゲ・カール氏などのチームと協力しながら関与でき、2005年6月には、小生も翻訳チームに参加した『地球公共財の政治経済学』が出版されました。(高橋一生監訳・編、国際書院)。

三回目出向先の、(財)日本国際交流センター(JCIE)では、故山本正理事長の下で、人間の安全保障の概念の進化・具体的実践アプローチの検討や、東アジア共同体に関する知的インフラ調査を担当し、東南アジアや韓国の著名なシンクタンクやNGOなどを回って、意見交換・情報収集を行いました。アマルティア・センと共に人間の安全保障委員会の議長をされていた緒方貞子さんや、同委員会メンバーの、元タイ外相で、現ASEAN事務局長のスリン・ピツアン氏などの著名な方と少人数のワークショップで意見交換し、夕食を取りながら懇談できたことは得難い経験でした。

仕事上の苦勞と喜び

エジプトでは、駐在当初は、メールはおろかファックスもなかった時代で、電話をかけようと受話機を取っても、発信音が鳴り始めるのに数分以上を要し、手動交換システムなので、正しくダイヤルしても間違っつながることが多くありました。そこで、かけた方が、相手にまず「誰？」と聞くのが通常でした。断水も頻繁で、埃っぽいカイロを駆けずり回って仕事した後に、帰宅してシャンプーで頭を洗い、さあ流そうというところで水が止まったこともあります。



これに対してパリは、インフラ面で問題はなく快適でしたが、当時はまだ官官接待が当然の時代で、パリで多く行われる国際会議に、日本政府代表団として出席する本省からの出張者や、アフリカ、他の欧州諸国への出張前後にパリに寄られる方

を、本部からの指示により、食事にお招きすることが多く、場合により空港送迎も行いました。週末は自ら運転して、ベルサイユやノルマンディーなどにお連れすることも多く、走行距離は年間3万キロと、東京のタクシー運転並みでした。このような接待に費やした時間を1日=8時間として日数換算してみたら、1989年では、95日に達していました。国際会議出席が107日、ヨーロッパやフランス語圏への出張が77日、パリ事務所の年間ワークデーが248日だったことと比較すると、随分長時間が接待に充てられたものです。ただ、幸い私は、人と食事をとることも、車を運転することも好きだったので、接待自体が苦痛ということはなく、土日も無く働いた割には、パリ時代も大変面白かったと思います。但し、マイカー通勤で運動不足の上に、接待で食べ過ぎる、不健康な毎日でした。夕食でフランス料理のフルコースを2回食べることもしばしばで、当時は体重が20キロ近く増えました。深夜・早朝まで続く国際債務交渉や接待で、睡眠不足の上に、翌日も接待で昼からワインを飲んで運転することも多く、4年近い滞在中、軽い接触事故を含め、9回事故を起こしました。人身事故が無かったのは幸運としか言えません。

仕事が難しく嫌だと思った事はありませんが、ずっと感じていたのは、いつも時間に追われ、十分納得いくまで掘り下げた仕事ができない、ということでした。就職以来、退職する数年前までは、援助予算、中でも円借款は右肩上がり伸びていました。地域的にも、セクター的にも多様化が進む中で、職員数がそれほど伸びないため、1人当たりの仕事の量が増えるばかりでした。担当案件や、国・セクターに関する勉強をもっとじっくりやりたいと思いながらも、『右から左に』仕事をこなしていかないと回らない、というのが悩みでした。



ホテルスルタンのテニスコートとジャカルタ東方を望む

5~6メートル成長し、以前は遠くに見えていた丘が、成長した木々に隠されて見えなくなっていたのに感動しました。

仕事で得られる喜びとしては、多くの途上国で開発に真面目に取り組む、有能な官僚や現地スタッフと共に、国造りにドナーの立場から参加できたことです。どこの国でも、宗教や人種の如何を問わず、人間は基本的に変わらないな、と実感しました。円借款対象事業は、完成までに5~10年を要するようなインフラ案件が多いので、駐在中に自分が手掛けた案件の完成式に出られることはまずありません。しかし、インドで増えていた植林・生態系保全事業では、同じサイトを2年後に再び訪問する機会があり、植樹された木が2年

インド駐在時代の末期で、後任者も着任していた1998年5月に、インドは核実験を行い、パキスタンがこれに続きました。このため、ODA大綱を踏まえ、日本政府は、両国への新規の無償・有償資金協力供与を停止しました。(人道上のものは除く)。核実

験を行えば、ODA 大綱により日本からの ODA が停止されることを、印パ両政府は、承知していた筈です。また、日本の対印円借款は、従来の経済インフラに加えて、上記の住民参加型植林事業などの、農村貧困層や環境保全に直接寄与するタイプの案件が増えていたところでした。

2001 年 9 月 11 日の、米国での同時多発テロと、その後のアフガニスタンとその周辺国をめぐる一連の国際的な動きを踏まえ、新規 ODA 供与停止措置は、2001 年 10 月に解除されましたが、この一連の動きは、私に大きな問いを投げかけることになりました。その問いとは、『そもそも、共に貧困問題や環境問題を抱える印パ両国が核実験を行う必要が、本当に有ったのだろうか。自国の安全保障のために行われたこと（核実験）は、本当に国民のためになったのであろうか。少なくとも、ODA 供与が停止されていた期間は、貧困農民の所得向上や植林などの、新たな環境・生態系保全活動が中断されたことになる。軍事力で国境を守る伝統的な安全保障からパラダイムシフトして、両国が共に抱える貧困問題、水、森林などの自然資源管理に協力して取組むことで、両国間の信頼醸成を図り、核実験を含む軍事支出を減らして、国家間武力紛争の予防に結びつけることはできないものか』というものでした。このような視点から、FASID・JBIC 開発金融研究所時代や、法政大学教員時代のゼミでは、環境安全保障と地域協力による信頼醸成の勉強に取り組みました。現在の尖閣諸島などをめぐる中国、台湾、韓国との関係悪化も、このような視点から克服できないものかと願う次第です。

国際開発とどのように関わって来たか

ほぼ 30 年に及ぶ、円借款を通じた開発協力の実務者としての取り組みは、基本的にはデスクワークや、相手国の官僚、コンサルタント、コントラクター、NGO、マスコミなどとの会議や面談が多く、農村やスラムなど貧困の現場・最前線で働く機会は、年数回のモニタリングの機会などを除くと、意外とありませんでした。それでも、相手国のマクロ経済・セクター分析、他のドナーとの協調などのいわゆる『上流部門』での関与と、担当プロジェクトの審査、実施モニタリング、事後評価といった具体的な取り組みは、やりがいのある仕事でした。

私の生き方

これまでの歩みを振り返って強く感じるのは、『時空を超えたつながり』ということ です。どのようにして OECF に就職したか、ということ为例にとります。最初の採用面接をして下さったのは、当時できたばかりの人事課で採用担当をされていた、後藤一美さん（SRID の会員だったこともあります。現在法政大学法学部教授）でした。OECF の英文年報をぽんと置かれて、当時の総裁・大来田佐武郎さんの巻頭言を和訳せよ、との指示が出ました。不勉強な私は、‘United Nations’ が「国連」と知らず、「統合された諸国家」と訳してしまいました。この間違いを指摘され、「これは絶対に落ちた」と思ったのですが、採用して頂きました。元々、大学時代のゼミでは、「国際経済」と

「南北問題」を勉強し、援助自体に興味はあったのですが、“UN”を知らない私が、なぜ OECF に採用してもらえたか、この理由は一重に、多少仏語ができたためではないか、と考えております。

就活時期は、1973 年 10 月の第 1 次石油危機直後でした。それまで安く輸入していた石油の価格は四倍に上がり、日本の経済は崩壊するのではないかという危機感を背景に、中東との関係を強化するべく、当時の三木副総理が政府特使として、中東地域を訪問し、円借款を約束しました。その対象国に、アルジェリア、モロッコ、チュニジアといった仏語圏であるマグレブ諸国が含まれていたことから、仏語圏に対する円借款が始まったのです。ところが、当時の OECF スタッフには、仏語要員がいませんでした。このため、仏語を話せるスタッフが必要だという事で、採用して頂けたのだと思います。

それでは、なぜ、ある程度仏語ができたのか、ということですが、学生時代、仏に 2 ヶ月間遊学し、フランス人の家庭に泊まったので、会話ができるようになりました。遊学のきっかけは、ある仏人宣教師との出会いです。高校 3 年の時に、夜 11 時、横浜駅で時刻表を見上げている外国人を見かけ、英語で話しかけました。偶然にも同じ駅で降り、同じ方向に歩きだしたのです。彼は宣教師として近所の教会に来ていたのでした。彼に、アウグスティヌスの「告白録」（4 世紀に書かれたカトリックの有名な古典）を英語で読んでいる、と話したら、彼は喜び、以後二人で週一回、「告白録」を読み、同時にフランス語も教わるようになりました。やがて家族ぐるみで付き合うほど親しくなりました。ちなみに、なぜ「告白録」かという、当時の愛読書（内村鑑三、三谷隆正、矢内原忠雄、キルケゴール）のどれを読んでも「アウグスティヌスの告白録」が出てきたので、読んでみたいと思ったからです。また、なぜ英文で読んでいたかという、オバマ大統領の母校のハワイのプナホウ高校と慶応義塾高校グループの間の夏期留学プログラム（6 週間の交換留学）に高 3 の夏休みに参加したためです。因みに、その留学プログラムは、福沢諭吉の孫の清岡瑛一という慶応義塾の先生が始められたものです。



フランス遊学中、カトリックの宣教師の親類で、パリの郊外に住む人の家に、最初一週間泊まり、あとは他の親類の家を泊まり歩きながら、フランスの中を色々旅行しました。この最初に泊めて頂いた、パリの郊外に住む親類の方には、就職後、1 年間フランスに留学した際も、最初の 10 日程泊めて貰い、更にアパートも世話して頂きました。その 14 年後、パリに駐在することになった時も、家族ぐるみで非常にお世話になりました。私のフランスの留学も駐在も、この親類の方がいなければ、もっと困難なものになっていたはずです。（因みに、この

方のお孫さんの一人は、日本の若手音楽家をフランスなどに紹介したいという気持ちから、日本に来て、我々の紹介で、我が家と同じマンションの5階に住んでいます。後に聞いた話では、この親類の方の先祖をずっと遡っていくと、家系図は、「18世紀の捨て子」で途切れてしまうそうです。「18世紀にどこかで捨てられていた子供」を、誰かが可哀相に思って、拾って育てなければ、この家族と私の出会いは無かったのです。

このように、私という小さな存在の就職や、その後の人生の軌跡の背景には、①4世紀にアルジェリアとチュニジアの国境付近の町で生まれたアウグスティヌスという人、②18世紀にフランスのどこかで捨て子を拾った人、③私の学生時代の愛読書を書いた内村鑑三などの一連の人、④福沢諭吉とその孫（ハワイの留学プログラムの創始者）、⑤横浜駅で偶然会った仏人宣教師、といった、長い時間や遠い空間を越えた様々な人の存在と、それらの人の様々な想いが、存在しなければならなかった、ということです。因みに、ハワイへの夏季留学で一緒に行った仲間の中に、現在の妻との出会いもあったことから、私の子供達も、このような時空を越えた流れの中で存在している、ということになります。

(私の健康法：運動と自己管理)

私は、遺伝的に血糖値が高目なので、結婚後一年目位から、ジョギング通勤を始めました。JCIE 出向時代は、江東区森下の自宅から広尾まで、片道 9.2 km を鞆を持って、朝夕ジョギングで通いました。近年は、インド駐在時代に 45 歳で始めたテニスにすっかり嵌まり、2011 年 10 月には、自分への還暦祝いとして、通っている室内テニススクールで、日曜日の 11 時から 23 時半まで、上級を 7 レッスン連続受講しました。

このように運動が大好きで、自覚症状は無かったのですが、最近大腸がん検診で上行結腸(大腸)がんが発見され、10月17日に大腸の3分の1ほどを切除しました。(腹腔鏡手術自体は、3時間弱で、麻酔でテニスの夢を見ているうちに終わってしまいました)。

入院中に見た NHK スペシャルで、「地球上の生命誕生は、約 46 億年前の隕石衝突で火星から飛来した有機物にある」との、米国の学者の説が紹介されました。真偽はともかく、このような悠久の時間の流れの中で受け継いでいる、我が生命・身体を大切に、共に現在と今後共に生きていく方々や地球上の生命増進に役立てるように、今後は、術後の自己管理に努めたいと存じます。(飲酒は1か月、テニスは2～3か月禁止、その後もよく噛み、食べ過ぎず、飲酒も日本酒1合、ビール・ワインは2杯までなど)。